

私の監督時代

石瀬 徹 第34期

1998(度)のラグビー日本一は東芝府中に決まった。満員の国立競技場、ブルーのジャージのフィフティーンに囲まれ胴上げされ両手をピシッと高く広げ舞い上がった一人の男が私の目に焼きつく。“向井昭吾”東芝府中の現在の監督である。彼(彼というのもおこがましい存在になってしまったが)は、かつて同じ東海大学でラグビー部の私の1つ後輩にあたる。今年の東芝のハイスピードラグビーを追い求め続けた向井監督のラグビーは大学での彼のプレーをみている自分にとって十分うなづけるものがあった。この紙面で大学のことを長々と書くつもりはないが、当時東海大は要所、要所にはそれなりの体格に恵まれた人材がいたが、全体としては小柄なチームであった。監督は早大から和泉武男氏をよび、ミニ早大とよくいわれ、スペース&パス&スピードランニングラグビーを目指し、早い展開を志向していた。そんな大学で練習していたこともあって、私自身もラグビーセンスを100点とすると、センスのいいものから組み立てるだけのラグビーよりも、いつしか70点センスのあるものが15人いて、いかに100点に近づける目標をもちながら練習するかという考え方になっていった。ポールへのヘッドスピードをいかに高め、スピーディーな攻撃をいかにミスなくできるか、ボールをもたないプレーヤーがいるべきポイントにいつまでに必ずいて延々とつなぎまくるラグビーを目標に練習していった。千歳で私は徹底的に基礎をたたき込み、大学で個人のスピード+スペースラグビーを学んだ。

そして、26才、3年間働いた製薬会社をやめ、家業をつぐやいなや、母校千歳で約6年間、生徒を教える

機会に恵まれました。

前記の様なラグビーを是非具現化したい思いもあり、家業もそこそこにして全力で生徒の指導にあたりました。最初の一年目は、合宿等しか行かず、こんな短い期間で、自分の描いている戦い方は生徒に伝わらないと思い、学校の近くにアパートを借り、朝練、午後練と生徒と接する時間を増やし、コミュニケーションをはかりました。

この紙面では到底書ききれない程、試行錯誤の連続でした。自分は、向井と違い、本当に不器用な男で、自分でもおこがましいのですがやっとな自分の熱意が生徒に伝わり、ポジションごとのスペシャリストにも恵まれ、4年目のようやく準々決勝まで進むことができました。ここで忘れられないエピソードがあります。それは当時のキャプテン46期の菊池永敏君のお父様の言葉でした。

決して楽な勝ち方ではありませんでしたが、一回戦から4試合に勝利し、5試合目の準々決勝の相手は、現在神戸製鋼のWTBの増保のいた城北高校、当時の城北はFW、BKS実にバランスのとれた好チームでした。

今思うと、数%の望みにかけるしかないのは十分承知していましたが、私も若く、生徒は絶対勝ってやると私も含めて意気込んでいました。さて、城北戦を迎える数日前の練習において、キャプテン菊池君が、足首を剥離骨折してしまいました。私もあわてて、1年生の安斎君のお父様の経営するはり治療院に通わせたり、できる限りの処置をしましたが痛みが引かず、

いよいよメンバーを決める時になり、私は悩みました。菊池君は要のセンターであり、キャプテンであり、よもや最後の試合になるかもしれません。私はすかさず、菊池君の両親に打診しました。お父様が電話に出られ、その返事は「かまわず、試合に出してやって下さい。足が変形しようが、例え最悪の不自由な体になっても私達が責任をもちます。あの子にとってみんなと一緒にプレーしたことの満足のほうがはるかに大きいのです」という心暖かいお言葉でした。

「わかりました。」と私は、本当に涙で顔がぐしゃぐしゃになり一つの絆で結ばれていることに感激いたしました。

結果は大敗でしたが、ここまでやってこれたという満足感が、ノーサイドの笛と共に涙、涙のみんなの顔は今でも忘れない思い出です。基礎を積み上げ、積み上げしながら、選手自身もラグビーの楽しさと奥深さ、チームの仲間との深い結びつきを得ることができ、卒業させてやることは本当に監督冥利につきました。しかしその一方で志半ばにして部をやめていった生徒のことも今だに頭から離れずにいます。本当に色々あった6年間でしたが、監督時代は本当にしたい様に自由にやらせて頂き、又資金面でも大いに援助して頂き、OBの皆様、又合宿等において体を貸してくれた若手のOBの皆様には心より感謝申し上げ、ペンを置きます。